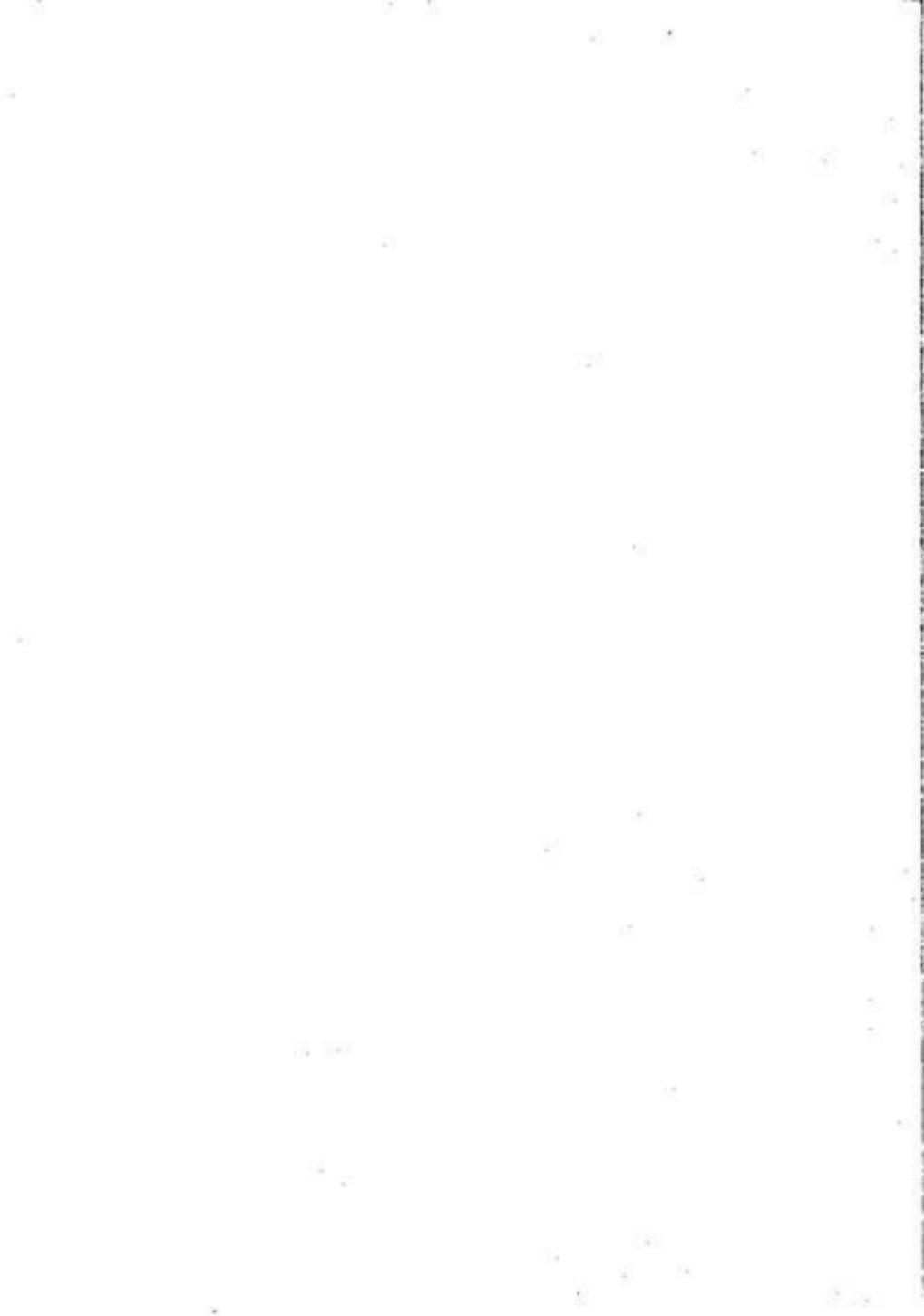


# 藤ノ木古墳と古代の河内

文化財講座記録集 3

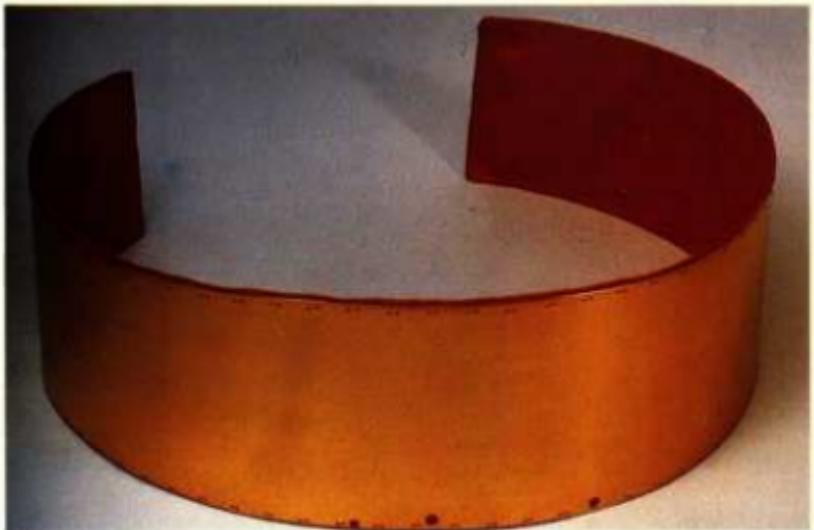




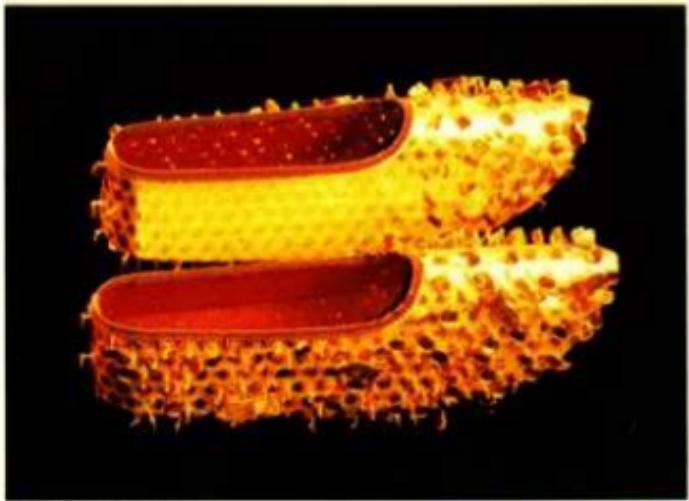
- ・本冊子は平成二年九月二十二日に、八尾市文化会館に於いて開催いたしました「文化財講座」の記録集です。
- ・写真・図表の引用文献は末尾にまとめさせていただきました。



① 筒形金銅製品



② ベルト



③ 金銅製杳



④ 金銅製冠



⑤ 玉廉状装饰品



⑥ 錦の掛け布

藤ノ木古墳と古代の河内

奈良県教育委員会 泉森

校

### 一、はじめに

ただ今ご紹介いただきました泉森です。藤ノ木古墳の石棺を開ける仕事をしましてから、あと一ヶ月ほど経ますと満二年になります。あの頃は、「大変忙しかったなあ」という感慨とともに、一年後に大阪のほうでお話をさせて貰えるような余裕が生まれるなんてと、電車の窓から高安の山を見ながら、そんなことを思いました。ここへまいりまして、又思いましたのは、まだ藤ノ木古墳の話をしているのかなあ、他のお話もしなければならないなあと思いました。しかし、私はこの二年の間に藤ノ木古墳というものの何がわかったのか、我々の仕事の反省も兼ねまして、再吟味をする必要があるよう思います。特に、いまだに被葬者論が展開されていまして、半月ぐらい前にもテレビで特別番組がありました。藤ノ木古墳の被葬者論が多く人の興味をひくようです。今日は、特に藤ノ木古墳が河内とどのようなかかわりがあるのかということを中心にして上げたいと思いまして、お手元の資料を作らせていただきました。それから、古墳内部の遺物を見まして、神話の世界というもの、遺物が何か我々に語りかけようとするものがあると思い、それを我々がどういうふうにとらえて理解をしていくのかという問題、この一つを中心に申し上げます。

### 3 藤ノ木古墳とは

二、藤ノ木古墳とは

#### (一) 出土状況の問題点

図1をまず見ていただきたいと思います。私が今まで藤ノ木古墳について述べてきたことの概略を申し上げますと、警察の捜査と一緒に、いろんなものの考え方を出すのは、まず現場へ戻る必要があるということを昨年來申し上げきました。我々、考古学をやっている者は、まず出土状況というものを検討しなければなりません。特に図1を見ますと、こういうふうに整然と遺物が置かれ

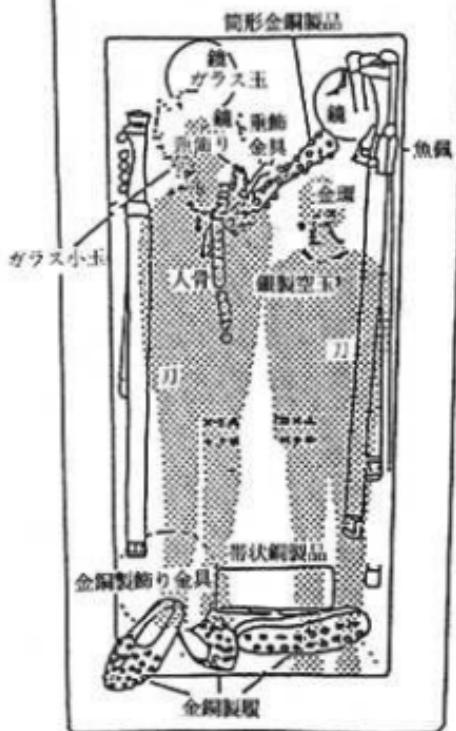


図1

ていることから、明らかに内部は荒らされていないことがわかります。もうひとつは網目で人の形を表現しましたが、石棺の中に一人の方がおいでになる。この二人の方は、同時に入れたという意見と、後でもう一人の方を入れたという一つの意見があります。しかし、石棺の中の遺物のありかたを見ていきますと、整然と置かれていますので、私は二人は同時に埋葬されたということを、一貫して主張してまいりました。一部には追葬ではないか、それがために刀が両方にあるとか、靴が履かせた状態でないとか、冠が折れ曲がっている。冠は図1の左側の人の足元のところに置かれてあったわけです。このようなところへ冠が置かれていますと、誰が見ても足に冠を履くのかと不思議に思うのですが、ここへ置いておいたというだけであります。この左側の人は男性だということが遺骨からわかつておりまして、一八〇二四、五歳の非常に若い男性であるということがわかつております。これは一年たった今も変わっておりません。私はこの人には冠のかわりに他に大事なものがあつて、頭の辺にそれがあつたからだと思っています。それは何かと言いますと、後でスライドでも見てもらいますが、小さいガラス玉、ビーズ玉をつらねました玉簾状製品<sup>たすきじょうせいひん</sup>、私の言う玉簾<sup>たすき</sup>、古典に玉簾<sup>たすき</sup>というものが出てまいりますが、そういうものが頭から

すっぽりとかぶせてあった、それが冠に代わる非常に貴重なものであったと思われます。石棺の中にはよく枕を置いたりするんですが、この方は枕を置いておりません。その代わり何を置いていたかと言いますと、三面の銅鏡が置かれていたわけです。今でも神社なんかにいきますと、ご神体になっているのは鏡が多いわけですね。それと同じで、今のコンパクトの様に化粧道具として使うというよりも、鏡自体にマジカルな面があつて、神に代わるようなものになるという面があります。頭のところに鏡を置くというのは、私は鏡で、この方のたまこじしや魂鎮たまこじんを図ったと考えております。日本でもそうであります、中国あるいは朝鮮半島全般に見ますと、「頭位優先」で頭の所は非常に大事にしています。足のところに置いたもの、頭のところに置いたもの、どちらが重要かと申しますと、これはもう、頭のところに置いたもののほうが大事であります。次に方位で見ますと、東側が重要です。難しい言葉では「東頭西足」といいまして、でくるだけ東側のほうに頭を置いて足は西の方にしています。藤ノ木古墳の場合には、頭を東側にして、足を西側にするセオリードおりの埋葬の仕方をしております。そして、頭位優先ですから頭のところに非常に大事なものを集めて置くということをしているわけです。左側の人物と棺の壁との間には刀と短い剣が

一振りずつ置いてあります。この逆の右側の人の横には、四振りの刀が置かれています。ある人は「刀が置いてあるから武人だ」と言っておられましたが、古代では、武器として男の人が使うかもわかりませんが、刀剣には「辟邪の剣」<sup>(へきせきのけん)</sup>という言葉がありまして、邪を切る、いわゆる、よそからいろんな災いをもたらすものをこの刀で守るという意味があります。もう少しわかりやすい言葉で言えば「護身の剣」ということです。身を守るために刀や剣を置くわけでありまして、亡くなつた後もいろんな悪霊がこの死者におよぼそうとするものを作れではらつて守つてあげる、そのため刀を副葬しているわけであります。次に、刀が出てくると、生前この方は非常にこの刀を大事にしていました。だからじくなつた後も刀を横に入れてあげて、この方の身分を表現しているのだといふ刀を置くについての非常にわかり易い説明があります。実はそういう面もあるかもわかりませんが、今まで骨が残っていたり、歯が出ている古墳のデータを集めて性別を確認しますと、女人の場合でも、男人の場合でも刀を両側におくという事が行われています。女人だから、刀に代わるものをしておったかというとそうではないんです。やはり、刃物というものは魔除け、辟邪に使うということをしますので、両側に刀剣を置いています。藤ノ木古墳の刀類

は実用品であるのか、実用品でないのかの二つの説があります。私はこれは実用品でないと考えております。わざわざこの館内にいれるために作ったものであって、普段から使っていたものではないと考えております。それから、足元に沓が二足ありますが、向かって左側の沓は壁のところへ立て掛けるようにしてありますので、私は、これは沓を履かそうとしていた意思のあらわれとみてます。そうしますと、この左側の沓、沓Aと呼んでいますが、小さいほうのこの沓は履かそうとしておった沓で、この人に合わすようにしていました。そして、その横のほうに沓の底が上を向いて重ねた状態でおかれている沓、沓Bと呼んでいるものがあります。沓が一足ずつあれば、右側の人の沓と、左側の人の沓、というのが一般的な考え方であります。しかし、私はそういうふうな一般的な考え方があまりしたくなくて、丁度一年ぐらい前に、Aの沓もBの沓も左側の人の沓だということを申し上げました。この考え方は変わつておりません。明らかにこれはスペアの沓だと考えております。何でも歴史を重んだ上でみるとよく言われるんですが、しかしそう考へても良いだらうと思います。考古学というのは遺物だけで、あるいはものの形だけで論じておつてもなかなか理解できません。ある程度、民俗学を応用しても良いだらうし、あるいは歴史の

力を借りても良いだろと私は考えております。そういう類例のひとつは、法隆寺に聖徳太子の御沓というのが残っておりまして、聖徳太子の沓として伝えられるものは二足がセットであるということから、この沓AもBも左側の人のものと考えております。伊勢神宮にも沓が残っておりますが、式年遷宮ごとに沓をあつらえられるわけですが、そのときも二足セットで作られております。これは、伊勢神宮の微古館にセットで展示されております。そういうふうに見ていきますと、これは両方とも左側の人とのものと考ええることができると、提案させていただいたわけです。ところが、それに対する反論としまして、沓AとBは大きさが違うし、Aのほうが丁寧に作ってあってBのほうは形も大きいし、沓の裁断の仕方も違う。あるいは文様の仕方も違うから、これは時代が違うんじゃないかという意見もでてまいりました。しかし細かく観察しますと、Aの沓もBの沓も亀甲紋、亀甲紋というのは沓の表面にある龜の甲羅のような六角形の文様ですが、その文様が非常に共通するところがあるんですね。全然時期が違うときに作っているならば、同じような寸法の同じような文様が出てくることがないわけですが、技法上非常に共通するところが多い。ただ沓が大きいか、小さいかだけの違いである。というところから、私は文様の作り方、

その他を見ていまして、この沓は同時に作ったものであると考えております。それから一番問題になるのが、いろんな被葬者論が展開される中で、性別の問題であります。一方は男性で一八〇・一四、五歳までと、若いということがわかつたのであります。右側の人はどうなのかということがあります。この右側の人の性別が非常に難しいわけであります。足のくるぶしのところに沓が有りまして、その横に帯状銅製品と書いてあります。帯とか沓がそこにあつたために、足首のところの骨だけが残っていました。骨の鑑定をしていただきました京都大学の人類学教室からは、未だ男性とか女性とかいう回答がきておりません。足のくるぶしの骨だけでは性別は決めにくいんだとおっしゃつております。これは一年前にご紹介しましたときも今日も変わっておりません。

### (二) 石棺内の一體合葬

この春だったと思うんですが、毎日新聞に右側の人は男性であると出まして私もちょっとびっくりいたしました。何故びっくりしたかといいますと、私は女性説をとっていまして、男性となると、私の説には都合が悪いわけであります。しかし、事実は事実として、そうなったときには私は考えを改めねばなりません。私が右側の人が女性であると決める材料は、足のところに足玉と呼ん

でいる直徑が二センチメートル近い大きなガラスの玉を、一つの足に九個つけていまして、合計一八個のガラス玉が足のところにあることです。一方、左側の人というのは、イヤリングもネックレスも非常に立派なものをつけています。立派なものをつけているのですが、この左側の人は男性であります。右側の人は簡単なイヤリングと銀の小さい玉のネックレスを一連つけていまして、装身具はそれしかりません。足のところにだけ足玉がついているということから、私は今までいろんな資料を見てきまして、奈良、あるいは群馬とか埼玉、千葉辺りで出ております人物埴輪の足元ばかりを見てみると、皆足首に玉を付けておられますのは女性です。男性のほうは我々と同じでズボンをはいておりまして足首は見えないということがあるのかも知れませんが、やっぱりつけても意味が無いと言うか、見えないからつけないんだろうと思いますが、足玉はつけておりません。そういう点で、私は右側を女性、左側を男性であると考えて、一年前にその説を出しておりまして、未だに繰り返して主張しているわけです。毎日新聞に男性説がでましたが、翌日、すぐ櫻原考古学研究所のほうでは打ち消しの発表をいたしました。私の男女一体ずつという説も、どうにか保つているような次第であります。そこで、この二人の人物の裏付けというのはど

うなのかということを考えてみると、これは夫婦ではないかというのが私の希望的観測であります。そうあって欲しいし、そうしてあげたいと私は思っているわけです。というのは、「日本書紀」「古事記」などを見てていきますと、一つのお墓のなかに何人かを合葬する例がみられます。合葬しているのは、御本人、これは男性が多いんですが、男性の場合は戸主に当たる人ですね。今で言えば、戸籍の筆頭に当たる人がおられて、そしておかあさんと自分の奥さんに当たる人ですね、大体そういう二人を合葬するか、あるいは、ご夫婦であるとか、あるいは親子を合葬するという二とおりの例があるわけです。一番多いのは夫婦であります。しかし、そういう例でも、部屋は同じでも棺は別々です。藤ノ木古墳のように当初から二人といふ例は非常に珍しいと考えられます。後で入れた場合は内部の遺物を一回片付けてからそこへ入れますので、何年か経過してからの場合がありますが、しかし、同時に入れるという場合は夫婦が多いということです。次に、阿豆那比の罪アツナヒといふのが「日本書紀」の神功皇后のところに出てきます。男性一人を一つの棺に入れたときにいろんな天変地異が起こったという記事があります。二人とも男性であったわけであります。人は神官であったと書いてあります。神官など一人を葬った場合に天変地異が

起こったのか、男性一人を葬ったためにそういうことが起こったのかよくわからないんですが、男性一人を一つの棺に入れた為に、いろんなことが起こったので棺を別々にして葬った。そうすると世の中が治まつたと『日本書紀』に出でまいります。そういうことから自然な形は男女・体ずつを、ひとつの棺に葬ることだらうと思われます。そして、二人の関係を考えると、人は同時に亡くなるのかという問題にも突き当たってきます。私は藤ノ木古墳出土品のルーツを探っていきますと、西アジアとか西シベリアの辺りにその起源が求められるのではないかということを以前申し上げたことがあります。そういうところにはどういう民族がいるのかと言いますと、遊牧系の民族がいるところであります。古い時代にはスキタイ民族等が非常に活躍した場所であります。中心である人物が亡くなりますが、奥さんが何人かおればその内一番若くて、大事にしている妃を連れにすることがあります。そういう例が報告されておりまし、実際バズイルイクという所で発掘いたしました例をみると、シベリアの凍土の下から、人間が冷凍状態で残っていたお墓が見つかっています。そこにも棺が二つあります、一つは王の棺で、一つは妃の棺であろうと考えられているのですが、妃の棺の蓋ふたを開けますと、明らかに首を縊められて殺されたよ

うな状態で残っております。主人が亡くなると、死出の旅に女性も一緒にいいていくということになります。我々から見ますと非常に悲惨な風習であるなあと思えるのですが、当時としては選ばれた女性として、ひとつ誇りであったとスキタイの伝承にあるようです。そういうことで私は、ひょっとしたら石棺内の右側の人は、殉死ではないかといふことも以前申し上げた事もあります。その可能性も、これは男性か女性かでかわってくるのであります。捨て難いと自分でも思っております。今は、そこまで論じたものはございませんので、私が一人オーバーランした考え方を出しているのかも知れません。

### 三、藤の木古墳出土品の語るもの

#### (一) 文様のルーツ

藤の木古墳出土のいろんな遺物に文様が沢山あるのですが、その文様のルーツというものを探っていきますと、例えば非常にきらびやかな金メッキの施された冠があるんですが、それはおののの山形をしましたところに、一本の木を飾りつけておりまして、そこに鳥がついているデザインになっております。図2は冠の展開図ですが、真っすぐ立ち上がっているのは木を表現しているのです。以前はこれは木ではなくて、波を表現しているのだという説があ

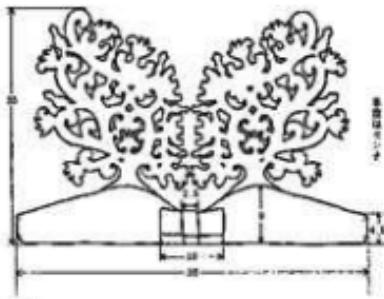


図2

りましたが、木であるという説が現在かたまつてあります。人きな大木に実がたわわになるように、歩搖と呼んでいた、直徑が一センチメートルぐらいの円形の金メッキを施した銅板を針金で木に付けるという形になつております。上のほうに何か飾りがありますが、これは鳥の飾りです。鳥の飾りが、枝にとまるような感じでついている。冠の木と鳥というもの、或は木の実のようなもの、こういうものが何を意図するのかということを考えますと、これも先程言いましたように東シベリア、西アジアのほうに、特にアフガニスタンのティラ・テベと言う遺跡から黄金の冠が出ておりまして、これと非常によく似ていることがわかりました。遊牧系の民族が中國の中心部を避けるように北側を迂回しまして、朝鮮半島に入つて、そして日本に来たということ説を私はたててまいりました。特にシベリアの考古学に造形の深い加藤九祚先生からもそういう見方でいいだらうというご意見をいただいております。木というのと、鳥というものの、これがこの文様の主題であります。木につきましては、聖なる木、特にスキタイ人は木を非常に大事にしておりますので、大きな高木、高い木であると考えていますが、そうではなくて、これは桑の木ではないかという意見を天理参考館の近江さんが述べられております。昔から、桑の木というものを非常に

加藤九祚（かとうきゅうぞう）  
一九二一年生。一九四五年  
○年シベリアに留学。上智大學卒。  
現在は創価大學助教授。  
著書に「天の蛇」「シベリア記」  
訳書に「ユーラシア記」  
など。

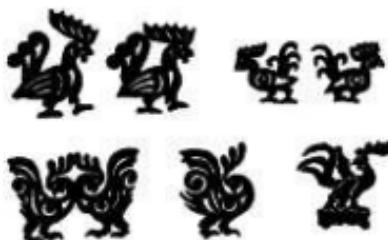


図3 バズイルク墳出土品にみられるニワトリを表す装飾

大事にしていて、中国ではそれをシンボルにしていた。中国に画像壇(がうとうわん)といいまして、お墓の部屋を組み立てる材料があります。日本では全部石で部屋を組み立てるんですが、中国では焼いたレンガのようなものを作って組み立てるわけです。それを埴室墓(はぢむろい)と呼んでおりますが、その表面に桑の木を表現して、そこに鳥をとまらせた絵画を描いたものがあるので、そこからきているのではない。だから近江さんは中国大陆先生説を唱えられたわけであります。しかし、私はそれに対して、例えば、中国で官位を冠で表現することはあるけれど、実際に黄金の冠をかぶった皇帝や侯爵はいないのではないか。例えば、漢の高祖、その他の皇帝の岡像を見ますと、今の早稲田大学の帽子みたいに上が平でふさが横についているようなかぶりものをしております。それは布と漆で固めた木あるいは竹のような、植物でできた冠をかぶっております。それは古い時代から同じような冠を中国の歴代皇帝はかぶっておりまして、あまり金属の冠というものにこだわらなかつたわけです。だから、逆に扶桑の木というものがお墓の中の文様にあるけれども、実際冠に表現したか、しなかつたかというところに私は意味があると思います。以前に読みました本に、漢の高祖劉邦(りゅうぱう)は、自分の故郷の沛県(ひけん)という所の竹の木を切つてまいりまして、それをまげて冠にして

近江昌司（おおみしょうじ）  
国学院大學大学院修了課程卒。  
「石上寺・白雲寺の成立と城  
開」、「中尾山古墳群見」「諸葛  
「扶桑園跡」について……藤  
ノ木古墳出土冠に関する論文。  
など。

頭にかぶっていたら、他の部下連中があまりいかぶりものでないから、よし  
た方がいいんじゃないかと皇帝に話したところ、いやこれは自分の出身地の竹  
で作ったものだから捨て難い。別に冠で自分の身分というものを表現しなくて  
も劉邦は劉邦であると書かれております。私は漢民族というものは金  
属の冠にこだわらなかつたと考えております。こうしたことから、金メッキを  
施したものや、光るものでできた目立つものを好んだのは、大体辺境の民族で  
あつたと考へるのが一番いいだろうと思つています。次に、中国の中原地方や  
北方のスキタイ系の文様を検討するのはいいけれど、もう少し中国の南の文化  
が藤ノ木古墳の遺物の中にあるのではないか、というご指摘をいただいており  
ます。私もこれは以前から思つていたことでありますて、中国の南の文化、あ  
るいは中国よりさらに南の方の文化が藤ノ木古墳の中にあつてもいいと思つて  
います。

### (二) 出土品からみる神話の世界

もう一つは杏に付いております魚の文様ですね。魚の歩摺を取り付けており  
ます。私は、木と鳥とそして魚、藤ノ木古墳の遺物の文様をこの二つに要約す  
ると、神話の世界が表現されているのではないかと考えています。『日本書紀』・

「古事記」などを見ていますと、木を題材にしたもののがよく出でまいります。木も「日本書紀」に出てくるぐらいですから非常に有名な樹であります。「古事記」に「和泉の国の免寸河の西に一本の高い樹があった」というのが仁徳天皇のところに出てまいります。和泉の国の免寸河というのがどこにあるのかわかりませんけれど、この木は非常に高く、大きな木であったとみられます。大きさの表現として、朝、東の方から太陽が昇ってまいりますと、この樹の影が淡路島まで届いたと書いてあります。和泉国の中海岸際にあったとしましても、淡路島まで届くというのは非常に大げさな話です。そして、夕方には、その影は河内の高安山を越えて大和まで届いたと書いてあります。こういう大きな木があつて、神木として崇められていたけれど、これを伐つて船を作つたという話が出てきます。船を作つて朝夕に、淡路島の寒泉から、仁徳天皇の飲料水を毎日運ばせたということが書かれております。最後に船が朽ちてしまふと、ひとつはこれを焼き塙を作るときの燃料にした。もうひとつは琴にして鳴らしたら、七つの甲に鳴り響いたと書かれています。ところが同じような話が「仁徳天皇のときの話として『播磨風土記』なかにも、明石の駅家、駅家というのは馬の中継所になるような所ですが、そこに大きな木がはえてい

まして、この木の影も朝には淡路鳥をかくし、夕方には大倭島根をかくしたとあります。この楠を切りまして船を作りますと、これが鳥船になつた。非常に速い船ができたので「速鳥」と名付けたとあります。我々には仁德天皇の頃に大きな木があつてこれをうまく利用したんだなと読み取れるわけですが、一方ではこの木の影がどこまで届いたかという問題を見てていきますと、これは仁德天皇の勢力範囲、直轄地というものを表わしておるんではないか。大阪の難波宮を中心としまして、一方は高安山のあたり、一方は淡路島まで勢力をもつていた。その勢力をしめすものであるというように理解したらいいんじゃないかなとの説があります。一方では天の鳥船という言葉があります。非常に専い船は、頭に天という字を付けまして呼ばれています。そうしますとこれは、天と地を結ぶ偉大な木であると考えるとどうなるのか、そしてそこに鳥が止まっている。鳥というものは、のちの神話の世界では白鳥の伝説があります。倭建命が亡くなつた後、二か所の墓を転々としまして、最後は大阪古市中の白鳥陵へ葬られるいきさつが出てまいります。その説話をみていくと、死者の魂を運んでいくのが鳥であるという理解ができるわけです。これらを藤ノ木古墳にあてはめますと、天界と地表を結ぶもの、これが藤ノ木古墳の「木」ではないかと考

えられます。そこに鳥が止まっている。鳥は魂を運んでいくというふうにとられるわけです。古い話であります、神武天皇の所に八咫鳥(ハチミツサギ)というのが、これは年配の方は修身その他で勉強されてご存じだと思いますが、大和への道案内に八咫鳥が出てまいります。明らかに方向づけと道案内ということでありまして、視点をかえると藤ノ木古墳の鳥も死後の世界へ引率していくものと理解することができます。次に、魚というのはどういう意味があるのか。昔に魚がついているわけであります。この魚につきましても、私は神話の中に捜すこと出来るのではないかと思います。いろいろな例を求めますと、魚の話が多いのは中国の南からフィリピンとか、あるいはもう少し南のインドネシア辺りに非常に広がっています。それらを見ていくと、魚自体の意味というのは一とおりあるようであります。一つは、魚を食べることで、命が永らえるという話であります。これは日本の神話の中にも出てまいります。例えば、八百比丘尼(ハチヒヂヌイ)の伝説があります。若狭の国(わかさ)の話として、女人人が人魚の肉を食べますと、これが八百歳まで生きたという話が伝えられております。魚を食べると命が非常に延びるという話であります。もう一つは、生命の誕生をいっておきます。魚が他の動物などよりもたくさんの子供を産む、卵からたくさんの中の命が生まれ

てくるという面を非常に強調して、生命の誕生と係わることを語っておられます。身近な例を上げますと、お正月に数の子を食べるのと一緒にありますて、沢山の卵を食べることで命が永らえ、そして、新しい生命が誕生するようになります。そういう二つの願いがあるようです。こういう例から、藤ノ木古墳の死者に対して蘇りを期待しておったんではないか。魂は天空をかけると共に一方では魚のシンボルをつけることで、死者の蘇りを願っていたのではないかと考えています。しかし、別の考え方も出てまいります。それは何かと言いますと、ペトナムとか東南アジアの神話を見ていくと、これは「場所」をシンボル化しているのではないかと考えられます。世の中といふものは三つの世界から成っていて、動物とか人は現在生きているので、当然陸地の上にいるわけです。陸地は「現在」を表現していると理解できるわけです。そうしますと、海とか水中といふのは何を表現するのかといいますと、「過去」というもの、地面の下にあたる部分でありますから、「過去・生前」を表現する。そして空といふのは、空に飛んでいるのは鳥でありますから、それは「未来」を表現するのではないかと考えられます。そうしますと、ペトナムとか東南アジアの神話を藤ノ木古墳の遺物文様に当てはめていきますと、「亡くなつた人の生前の世界」と、

死後の世界を鳥と魚の中にたくしているのではないかと考えることができます。以前、私は、藤ノ木古墳の被葬者が亡くなってしまったから、これから甦りが必要であろう。甦りという意味で、新しい生命の誕生ということで、魚については再生を望んでいたのであるし、鳥については、安らかな死後の世界に導いてもらうという意味で、鳥のシンボルをつけたと理解しております。しかし、もう少し考え方を進めていきますと、過去・現在・未来を死という時点でとうえてこの二つの考え方を文様の中に表現することも可能ではないかと思っています。そして、例えばボルネオあたりの神話をひらっていきますと、私の考えていることに都合のいい神話があります。それは、木と鳥と魚を二点セットにした話です。鳥は上界、魚は下界を示しておりまして、魚の代わりに例えばワニとか、水の中に住んでいる動物で代わりに表現することがあるようです。一本の木を切り払いまして、そのまま墓標にして、そして、上のほうに横木を渡しまして、そこに鳥のシンボル化したものを取り付ける。これがこの地方の伝承では、鳥の飛び立つ「未来」というものを表現していくとして、ドにはその地方の海辺に、或は川の中にいる生き物を表現しまして、蛇とかワニとか魚のようなものをこの下に描くと書かれています。木というものを一つの

媒体にしまして、鳥と魚がセット関係で出てまいりまして、人の過去、現在、未来を表現していると理解できるわけです。そういうふうに見てきますと、各民族の神話が藤ノ木古墳の中の冠とか沓の中に生かされているのではないかと思います。今まで南の方の文化の影響があまり藤ノ木古墳の中に無いのではないかと見ていたのですが、魚、その他のものを追っていきますと、やはり中国の南の方の神話の世界も、日本の藤ノ木古墳の中に入つておりますと、必ずしも北方文化ばかりではないということを遺物文様論から申し上げることがであります。

#### 四、藤ノ木古墳と河内の古墳

##### (一) 河内・大和の古道

次に、河内の古墳との関係でありますと、今まで藤ノ木古墳の造られている場所から、河内との関係が論じられていました、関連する豪族の話が再三にわたくつて出てまいりました。図4を見ていただきますと、藤ノ木古墳は坂崎町の法隆寺のごく近くにあります。大和川の流れに大体沿って、一本の道が河内のほうへ延びて、この高安の方へ来ていましたが、それを一般に電田道と呼んでおりまして、古くから利用していたということがわかっています。これより



図4 大和河内の古道と藤ノ木古墳

も南にある、二上山の麓を越えていきます大阪道とか、或は穴山越の道、或は竹之内越を越える道などと比べますと、古くから利用されていたことがわかつております。特に竹之内越の道は古くからあったような説明もよくされていますが、作られたのは推古一二年以降だろうと推定されておりまして、もう少し北のほうの道が利用されていたと言われています。例えば隋の使いの斐世清と

いう人がまいりましたときも、この竜田越を米まして、大和川に沿って南東に進み、奈良の桜井あたりに着き、そしてそこから飛鳥京に入ったということがわかつています。推古天皇の一〇年ぐらいでも、まだそういう道を使っていたことがわかつているわけです。竜田越が大阪とのメインの道であったと言えるわけです。そういう点から見ますと、藤ノ木古墳は非常に重要な場所にあったと言えます。そうしますと、この竜田道を大阪側に入つてまいりまして、藤ノ木古墳と比較される古墳は何かということが問題になります。

### (二) 郡川東塚・西塚古墳

八尾市の辺りに沢山の古墳がありますが、その中で郡川の車塚が注目されます。東高野街道をはさみまして、東側に東塚<sup>(図5)</sup>、西側に西塚という古墳があります。ほぼ平行に並んだ状態であったということがわかつています。そして、全長が五五メートルから六〇メートル前後、前方部を北側に向けました前方後円墳で、主体部は横穴式石室であるということがわかつています。私はこの全長の数値がひとつ問題点をもっていると考えています。

図6の①②あたりに前方後円墳を描いています。この場所は、天理市の石上というところの北側の丘陵と南側の丘陵です。ここに後期の前方後円墳が分布

25 雄ノ木古墳と河内の古墳

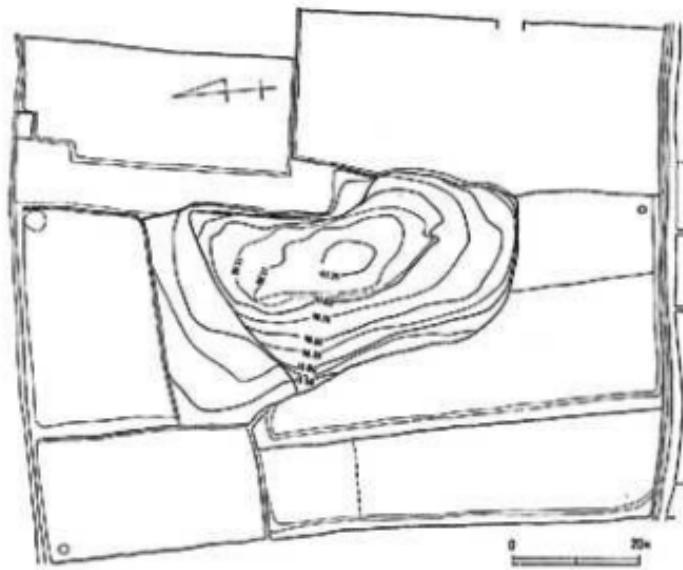
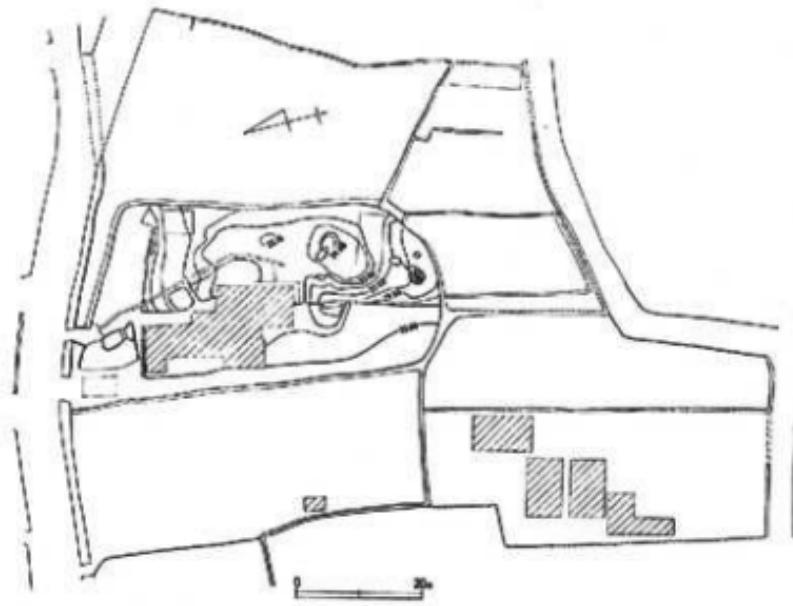


図5 郡川東塚（上）・西塚（下）外形測量図

しているのですが、例えば①の三基の前方後円墳ですね、二つ並んでいるのが石上大塚とウワナリ塚古墳、そして向きをかえて南側を向いていますのが別所大塚古墳です。この古墳の全長が大体一二〇メートルぐらいあるわけです。天理市の石上神社の近くにありますので、物部氏の墓であろうと推定されています。

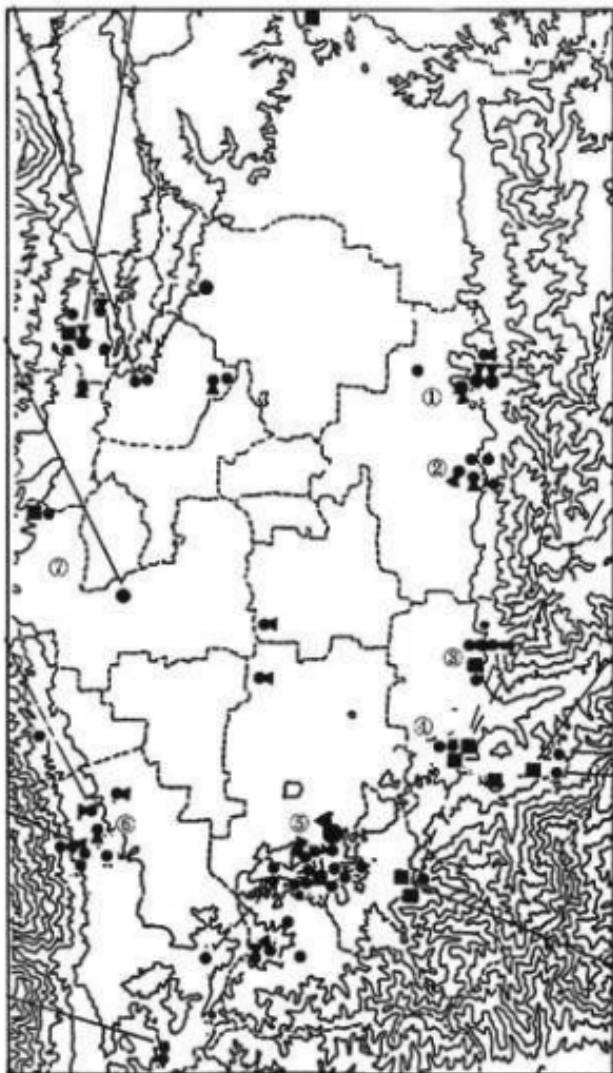


図6 大和の後期・終末期古墳の分布

す。この大和の石上辺りの古墳で人体一一〇メートル位、その一二〇メートルの半分が一基の車塚古墳の規模にあるという点で、注目しています。特に、河内の後期の前方後円墳で、横穴式石室をもつてるのは、この車塚古墳だけではないかと思います。残念ながらこの二つの古墳は、西塚古墳は明治二十五年頃に開墾されてなくなつたと書かれていますし、東塚古墳の方も昭和二年頃に新道の上取りでなくなつたと書かれています。これらの記録を東塚古墳の方から見ていきますと、残念ながら石室と寸法、その他はわかりません。古墳の大きさは全長が五〇メートルをわずかに越えて、後円部の直径が二五メートル前後だろうと推定されています。記録には奥壁に沿つて朱塗りの木棺があつたと書かれています。奥壁に平行して木棺がおかれていてそれに朱を塗っている。藤ノ木古墳の場合は、奥のところに朱塗りの石棺がおかれているわけですが、こちらの場合は朱塗りの木棺が置かれていたことがわかっています。中から長類とか刀剣類とか、土器類、あるいは甲冑とか馬具が出たと書かれています。特有名なのは、ジカツナイレムニコトタマスミ「画文帶神獸鏡」という、中國の南のほうで作られた鏡でないかと言われているものが、この古墳から出ています。藤ノ木古墳からも偶然かもわかりませんが、画文帶神獸鏡の文様の異なるものが出ています。この郡川の東

塚出土鏡と同じものが各地から七面ほど出ています。この鏡の分布は大阪から奈良を横断しまして、伊勢湾の周辺にまでひろがっている事がわかっています。同じ形の鏡が多数あるということで、この車塚古墳の鏡は非常に有名であります。これと非常によく似たのは江田船山古墳のものとか、ちょっと変形させたものが和歌山県橋本市の隅田八幡神社に伝わっている銘文のある鏡なのですが、それらと兄弟鏡であることがわかっています。こういうことから、藤ノ木古墳との共通性が多いのではないかと考えられます。古墳内から出土した十器の中にも朝鮮的な、いわゆる陶質十器と呼んでいますが、そういう遺物があったということも聞いております。一方西塚古墳のほうは片袖式の石室で、西側に沿いまして、だいたい軸線に沿いまして、朱塗りの木棺が置かれており、袖のところからたくさん土器が、奥壁に沿ったところから刀類とか武器その他が出たと報告されています。藤ノ木古墳も袖のところから土器が、石棺の後ろからはたくさん鉄鐵とか、刀とか甲の鉄板の破片が出土しましたので、遺物の配置での共通点が多く認められます。西塚古墳の石室の規模は、長さが五・四メートルで幅が三・六メートルあったと報告されていますが、石室の全長が五・四メートルというものは別に大きな方ではありませんが、玄室の長さが五メートルを超

7 6 5 4 3 2 1  
神奈川古墳  
井田川茶臼山古墳  
龟山2号墳  
神島  
岡津古墳  
郡川車塚古墳  
新沢一〇九号墳

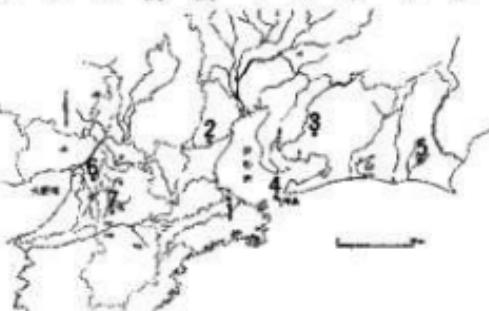


図7 西文帝神原陵山古墳

えますと人きな石室と言ひえます。石室の幅が二メートルを超えているというの  
は非常に大きいわけです。(表一) 石舞台古墳などがこれにあたるわけで、藤ノ木古墳  
でも二・六三メートルです。ひょっとすれば二・六メートル位の誤植ではない  
かなという感じがいたします。そういうふうに見ていきますと幅がもし二・六  
メートルであれば、藤ノ木古墳と同じ位の幅で石室の寸法は少し小さいといえ  
るわけです。(藤ノ木古墳は玄室高一四・六メートル) このふたつの古墳の時  
期につきましては、古墳時代の後期でも初めぐらいだらうと思います。前方後  
円墳という形をとつており、中から出たものに鏡の飾りのついた耳飾りや、朝  
鮮的な土器が入っているということから、時期を占くしていこうという考え方  
があつたようです。私は残念ながら、出した土器を、土器というものは時代  
を決めるのに非常にいい手掛りになりますが、見ておりませんのでいつごろと  
いうことはいえません。しかし、この辺りの古墳の分布、その他を見ていま  
すと、六世紀中頃ぐらいではないかと考えています。本当にこの車塚古墳から  
出土した遺物がどれとどれなのかを再検討する必要があると思いますが、大和の古  
墳と比べて、六世紀の初めから中頃ぐらいにもつていけるのではないかと見て  
います。中河内の古墳文化の全般的な流れから見て、後にこの辺りを本拠にい

表1 秦鹿邑反大清六式石室

名	年	生産地	量	原				製		販
				原	原	原	原	製	製	
電動機	昭和20年	西	76	2.4	3.3	7.0	3.7	1.2	34.8	販賣
電動機	昭和20年	西	224	3.85	4.76	12.33	2.58	0.73	85.00	販賣
電動機	昭和20年	西	70	2.6	—	9.5	2.5	—	29.5	販賣
電動機	昭和20年	西	28	3.1	4.50	9.05	3.84	1.2	34.30	—
タリヤツモツ	昭和20年	西	98	3.0	4.0	—	0.0	0.0	—	販賣
二重扇	昭和20年	東	419	0.01	0.15	0.62	—	—	—	販賣
扇	昭和20年	人間山	6.6	3.6	—	7.6	—	—	—	販賣
天王寺	昭和20年	西	6.86	1.96	4.26	8.06	—	0.0	14.40	販賣
扇	昭和20年	人間山	4.2	2.63	4.14	8.14	—	2.35	24.60	販賣
扇	昭和20年	人間山	4.2	2.8	3.0	8.12	1.1	1.4	10.7	販賣
扇	昭和20年	人間山	4.82	2.68	5.98	10.38	2.05	1.95	12.00	販賣
天王寺	昭和20年	西	4.5	2.3	—	—	—	—	—	販賣
扇	昭和20年	人間山	4.5	2.3	4.48	8.5	1.6	1.0	14.3	販賣
扇	昭和20年	人間山	4.30	2.90	4.01	8.50	1.76	1.24	12.00	販賣

たしました物部氏の名前が、被葬者としてよく取り沙汰されております。確かにこの高安山の麓からさらに北の右切あたりまで、いろんな神社や寺院、その他の遺跡を調べると、物部氏の伝承を持ったものが多く見られます。そうしますと、車塚古墳も物部氏一族の河内側の墓であるという考え方ができるのか。河内のこの辺に本拠を持った一族が、大和の古墳に比べて大体半分ぐらいに墳丘の寸法を考えて造ったということを考えられるのではないか。後に、物部守屋が河内の洪川にいたということがでてまいりますし、「刑の辺りも物部の本拠地であった」ということが記録にててまいりますので、やはり物部氏の本拠地の一つであつたといふことがいえるでしょう。それに関連してこの高安山の麓にある古墳の被葬者を誰にするかは非常に問題であります。この一基について物部氏色の強い古墳と考えてもいいんじやないかと思います。そうしますと、藤ノ木古墳の被葬者をいろいろ論ずるに、比較できる重要な資料になるでしょう。鏡、その他の遺物の出土状態であるとか、或は、石室のなかでの石棺の置き方、その他、共通項が多くあるのは車塚古墳と藤ノ木古墳が同一の文化圏のためか、あるいは同時期のためか、また同一豪族のためなのか、もう少し郡川の車塚古墳の研究をすすめていくと、間接的に藤ノ木古墳の問題を解き明

かす鎧があるのではないかと見てています。最後のまとめはスライドが終わった後で申し上げたいと思います。

## 五、藤ノ木古墳の実像

### (一) 墳丘・石室・石棺

これは藤ノ木古墳を上空から見ましたところで、藤ノ木古墳は前方後円墳なのか、円墳なのかということが論議になりました。地形だけを測量しますと、丸い塚であるということがわかつていますが、以前に前方部が削られていた場合はどうなのかという問題があります。この航空写真でみると、東側(写真左)に果樹園がありますので、前方部のように見えますが、順次、水田が南へ行く程低くなっています。そこに果樹を植えているために前方部状に見えていました。南側で検出した墳丘裾部から見ますと直徑が四七メートル位の円墳であることがわかりました。東南方向に開口する横穴式石室が墳丘の中心に向かって延びています。これから見ますと、なぜ藤ノ木古墳は円墳であるのかということが、問題点として残ってまいります。

これは石室の正面から石棺を見たところです。この石棺は家の形をしておりますので家形石棺と呼んでおりますが、明らかに向かって右側の方、東側の方



写真1

が大きく造られています。幅も広いし、蓋も高くしています。このように、側面から見て明らかに差がついている石棺は非常に珍しいわけですが、藤ノ木古墳の場合は東側を強調しています。先程言いましたように、東側に頭位があるということがこれから見てもわかります。東側を優先させています。

これは石室内の状況であります。西側の袖の部分に土器を置いています。

先程言いましたように、郡川の車塚古墳でも袖のところにたくさん土器が置かれていたことが記録にあります。大体、土器類その他のものは両側の広がったところ（玄門）に置くようです。

（写真4）

これは石棺を開ける前に内部の状態を知るため、ファイバースコープで我々の内臓の中を見るように、内部を見た状態です。奥の喉が見えています。水が、溜つてうっすらとした緑色に見え、その上にいろんなものが浮いていることがわかりました。そして、金属のものがあるということがわかりましたし、刀状のものも見えてます。ファイバースコープで見まして、水が溜っていることと、その水の上にいろんな繊維のようなものが浮いていること、そして中はあまり乱されずに残っているという三点のことがわかりました。この結果、石棺の調査に対して私は、心の準備と、調査計画を練ることができたわけです。



写真3



写真2

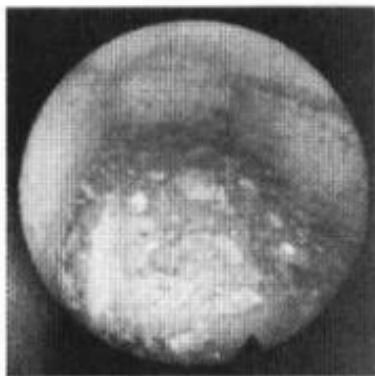


写真4

次に石棺の蓋を開けました。水が一〇センチ程溜っておりまして、その上にごみのように繊維の固まりその他がたくさん浮いておりました。左の下のほうに苔があります。画面の上が頭で、下のほうが足元にあたっております。真ん中ぐらいのところの水中に骨が見えております。

これは石棺の蓋の裏側です。たくさんのゴミみたいなものが付着しています。

これは棺内が水没しになりました、ある時期は石棺の合わせ目のところを越えて、蓋の天井部まで一杯に水が浸かったということを示しております、ここ



写真5

に織維とか紐のようなものがたくさんこびりついたのです。

このように北側の人、図一の左側の人の足元のところに沓が一足立て掛けたありました。そして沓の東側に冠が置かれています。沓が一足、足の先に添えるように置いてあったわけです。

東側（写真上）に頭があり、頸椎や脊椎、腰椎があつて骨盤が無くなっていますが、足の骨が沓の手前までいきます。そして北側（写真左）に刀と、斜めに剣が一振置かれています。南側には刀が四振置かれているのですが、鞘が腐ってぼろぼろになって、把頭その他は横にひっくり返った状態になっています。南側人物の骨は消えているのですが、イヤリングが出ていますのでその東側が頭部で、首飾りがその西側にあり、さらに西側にも身体があつたはずです。南側人物の骨は消えています。金銅の帯の下からやっと足首の骨が出てまいりました。そういうことで二体の人が棺内に平行に葬られていたということがわかりました。この帯のところに沓が上向きに置かれています。こういうものを見てていきますと、これらの遺物は南側の人のものと、考え易いのですが、明らかにこの沓は履かしたような状態ではありません。帶もたたんで足の上にのせてあるという状況でありますので、北側の男性のものであると、私は考えてます。

35 藤ノ木古墳の実像



写真 6



写真 7



写真 8

これは頭元<sup>(写真9)</sup>の状況で、イヤリングや銀の中空玉<sup>(うつらだま)</sup>のネットレスが一連出てきております。写真中央に筒形の銅器が置かれておりまして、この人の頭に近いところにありますので、一説には髪飾り説が出ておりましたが、いろいろ他のものと比べてみると、これは楽器と考えるのが一番いいであろうと思います。樂器を銅で作りまして、金メフキを施して、そして紐をつけて死者の頭元に置く。これも魂鎮めの道具に当たると考えています。南側の刀のところに魚の形をした魚佩<sup>(ぎはい)</sup>というものが置かれています。刀に、魚佩という魚の形をしたものを取り付けるということが、今回の調査でわかりました。今まで、魚佩といふものが何の為にあるのか、よくわからなかったのですが、刀のさげ緒の端に取り付けたものであることがわかりました。しかし、なぜ魚の形でないといけないのか、今まで答えがでなかつたのですが、私は先程の、木と鳥と魚というものから、魚のシンボルは過去を表現しようとする意図だったと考えております。韓国的新羅天馬塚古墳では、大刀の横に魚形の飾金具が置かれています。

これは最初に申し上げました、冠より大事なものです。北側の若い男性の頭の部分はイヤリングの位置から決めることができます。この人の頭のところに、

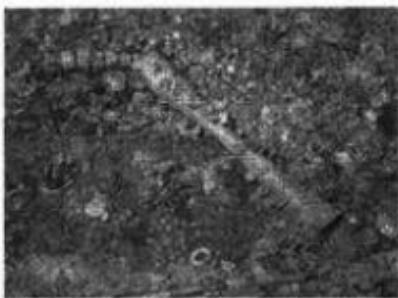


写真9

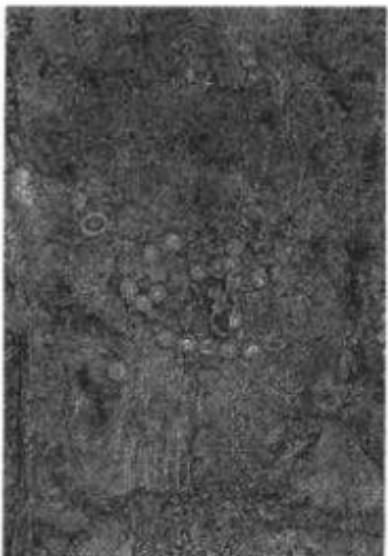


写真10



写真11

小さいビーズ玉が螺旋状にぐるぐる連なっております。そして横に糸の切れた玉がいっぱいありますし、ちょうど首のところから玉簾のように腰のあたりまで、ずっと玉がつながったものが垂れています。私は、この死者の身につけた一番大事なものは、この玉を連ねた装身具であると考えています。これは何であるのか非常に問題であります。古典の中から例を引いていきますと、「玉を付けた服」と「玉簾」と呼んでいるものの二つがあります。そのうち、これは服というよりも頭部から腰部まで一つにつながっているので、装身具と考えますと、古典から名称をかりると、「玉簾」と呼ばれているものが一番いいだろう



写真12

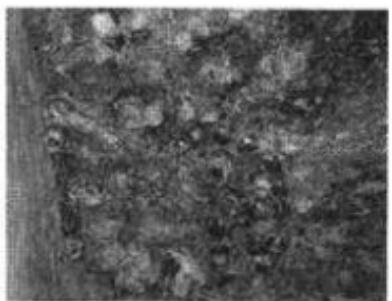


写真13

うと思います。かずらでありますから、頭部を飾り立てるものです。それが非常に雄大に肩から腰に至るまで、一体になるように作られている点で意味があると考えております。写真左に右の肩甲骨や右手の関節の部分、そして右手が伸びてありますので、玉簾状に腰の辺りまで垂れ下がっていたことがわかります。これは南側の大刀です。<sup>(写真11)</sup>特に玉經人刀と呼ばれるもので、そこに魚佩と呼んでいる飾りが付いています。魚佩は形を変えていますが、伊勢神宮の神宝の中に「鮫形」<sup>(さなげ)</sup>というものがあります。こういう藤ノ木古墳の時代のものが形を変えながらも、伊勢神宮の神宝の中に残っていることがわかつてまいりました。

これは枕の代わりにしていた鏡です。三枚の鏡が三角形の頂点になる様に置かれていて、頭は大体この三つの鏡の真ん中ぐらいいくるようになっています。鏡類その他の大事なものは、大体頭の周辺に置き、特に鏡を枕の様にした点で藤ノ木古墳の特徴であると思っています。古墳時代の終わりになりますと、鏡を棺内に入れることができなくなるわけですが、藤ノ木古墳の場合は四面の鏡を石棺の中に置いていたという点で注目されます。

これは、<sup>(写真13)</sup>南側の人の足玉です。脚部の上に沓と帯を置いておりましたので、骨が残っておりました。足首を飾る感じで、非常に大きなガラス玉を片足に九個ずつ、合計十八個を丸く巻き付けています。そして足を重ねた状態で横向き



図8 画像壇にみられる猿尤圖

<sup>(写真14)</sup>頭上には弩、両手両足にそれぞれ武器をもち、恐ろしい獣の姿をしてゐる。しかし、猿尤は五兵（五種の兵器）の創始者として、軍神でもある。



写真15

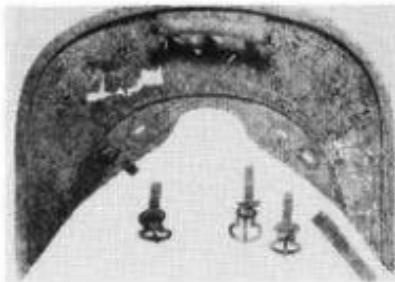


写真14

に葬っています。西側（写真左）が石棺の壁ぎりぎりですので、脚部は横向きにしたのだろうと思いますが、私は足玉を付けていることから、女性であると考えています。

（写真14）

これは藤ノ木古墳の第一次調査のときに石棺の裏側から出た馬具の鞍金具です。この鞍金具についても、いろんな解釈がされています。後輪の中央部分に把手のある金具が付いています。この金具は鬼神を浮彫した金銅板に固定されています。（写真15）鬼神は方相師との説がありますが武神を象徴する蚩尤ではないかと考えています。日本では兵主と呼ばれています。その横の表面の六角形の文様の中に、鳳凰のようなものとか、虎のようなものとかが描かれています。真ん中の取っ手のついた部分とその両脇につきましては、中国というものの、中華といふものを表現しております。そのまわりには、象が描かれていますし、兎とか、あるいは羽根のはえた魚が描かれています。これらはインドの神話の中に出でまいりますので、中国から更に西の方の国々を表現しています。中国を中心とした神話の世界を凝縮した地図であると考えています。

（写真16）

これは馬具に描かれた象の部分のレントゲン写真を拡大したもので、非常に精巧な彫刻をしまして、更にその上に金で象嵌を施すということをしており



写真16

ます。こまかい毛彫りが施され、日本で最も優れた馬具のひとつであると言わ  
れております。

これは藤ノ木古墳の馬具に非常によく似ていると言われている、韓国の慶州  
天馬塚古墳の馬装です。こういうふうに非常に鮮やかに飾り立てた馬具類が藤  
ノ木古墳の中にはいっています。飾り馬は人が乗るのではなくて、一種の神  
を迎える行事や、祭りに使われたものであると考えられます。

### (二) 馬具・冠・簡型金銅製品・沓

これは冠を展開した状況であります。出形をしたところに太い木がのびてい  
まして、枝がたくさん出ており、そこに鳥の飾りが付いています。これにいか  
のような格好をした飾りがありますが、私は花が咲こうとする直前の蕾を表現  
していると考えています。つぎに、渦巻き状になっているところを波形に見ま  
して、その上の三つに飛び出したところを船にみようと言う意見もあるのです  
が、冠に船というのもバランスが悪いので、私は、これは木の新芽を表現して  
いると考えています。

(参考)

これは筒形の金銅製品と呼んでいるものです。いろいろな説がありますが、  
私は最近、自説を撤回いたしまして、楽器とみるべきだろうと考えています。

(参考)



写真18

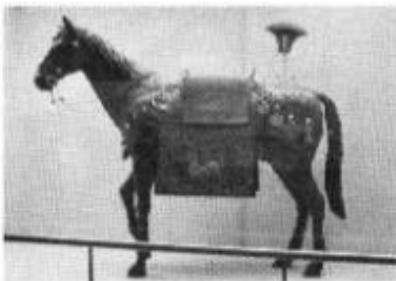


写真17

昨年、復元品を作ったのですが、このように錦の紐を真ん中の金具のところに取り付けまして、たくさんの飾りがついております。金具自体もふれあって音がしますし、内部が空洞である事、朝鮮半島出土の長鼓と類似していることからみまして、これは楽器とみるのが一番いいと考えております。

(写真19)  
これは冠の起源で注目しました、バズィルイクという所のお墓で見つかった

女性のかぶり布です。冠というものは、もともとは植物でできたものと、動物でできたものの両方がありますが、こちらは動物でできたものです。獸の頭の部分の毛皮を剥ぎまして、そしてそれをかぶり布にして、鳥の縁飾りを取り付けたものです。頭飾りに鳥が表現されている一番古いものです。これは起源前二世紀頃のスキタイ民族の女性の冠であります。

(図9)

これは藤ノ木古墳の冠の先端についております三角形のものを理解する資料です。スキタイ民族の絨毯の文様を見ますと、真ん中のほうは咲いている花で、垂れ下がっているのは咲き終わったもの、そして、上を向いているものは蕾を表現しています。これから咲こうとするものを表現しています。こういうスキタイ民族の衣装からも藤ノ木古墳の冠の文様は、「生」の表現で、次に花が咲こうとする蕾を重視していることが理解できるわけです。



図9 バズィルク第5号墳出土の毛氈  
騎士と女神

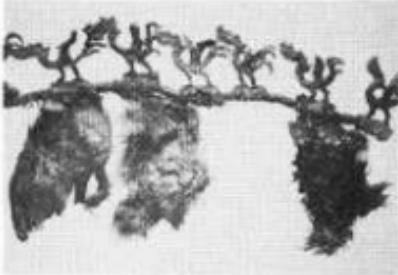


写真19

これは紀元後二世紀ぐらいの、中國でいうと後漢という時代にあたります、アフガニスタンのシバルガン地方で出土した黄金の冠です。聖なる木を表現して、藤ノ木古墳と同じ様な、たわわに実る果実を表現する歩搖が金の針金で取り付けられ、そしてその上に、二羽の鳥が付けられています。木に鳥を付けるというのは、紀元後二世紀頃の黄金の冠にも見られ、それが朝鮮半島を経由して日本に入ってくるという、中國の北側を迂回するような文化が、藤ノ木古墳の出土品に見ることができます。

次に、巫女の埴輪に足玉が付いた例を上げます。これは、奈良県の石見遺跡から出土した埴輪ですが、足玉をつけております。こういうスカートをはいて下着があつて、そこに足玉をつけています。私は、これは女性の埴輪とみています。これは復元したベルトであります。藤ノ木古墳の場合はこれを折り曲げていましたが、伸ばすと大体一メートル近くになります。内側に綾の布を当てていることがわかりました。両側に穴があいておりまして、そこに紐を通して腰に結び付けたようです。このベルトが北側の人ものであるという理由はこういう幅の広い帯をしめる人は、人物埴輪その他からみまして、男性の持ち物であるということからです。



写真20



写真21

これは群馬県猿音山古墳から出土した男性の埴輪です。非常に幅の広い帯をしております。この人物は墓の主なのか、神官なのか両方の説がありますが、幅の広い帯をついているのは男性です。女性の埴輪を見ますとだいたい紐を三重ぐらい腰に巻いた細い布製の帯を付けております。こういうものから見ていきますと、幅広の帯は男性の持ち物で、幅狭の帯は女性のものであるということがわかるわけです。

これは北側の人の足元にありました沓ですが、魚の歩搖がついております。足(沓)に魚をつけ、頭(冠)に鳥をつけるというのが、藤ノ木古墳の神話の世界であると考えられます。



写真22

（写真24）  
沓の起源はどういうものかというと、やはり木製や皮製の沓ではないかと考えられます。藤ノ木古墳の沓のように金属になる前は、こういう木の沓があり、これに金属の板その他を張ったのでしょう。そしてだんだん金属だけになるんだろうと思います。これは中国の六朝時代の沓です。中国西方の砂漠地帯のウルムチから出ています。

（写真25）  
これは中国の唐代の沓です。沓がどう変化するのかを見ていただくために写しました。このように先がそった沓が中国の唐の時代になって出てまいります。日本の奈良時代にもこの様な沓が入ってきていたんだろうと思われます。

（写真26）  
これは復元した冠です。かぶると立飾りが耳の両側に来ますので、私は以前から大角鹿などの動物の角を表わしているのではないか、ただ表現の仕方として樹に表現したのではないかと考えております。二つの山の頂上に大きな樹がはえているということに、意味があるのではないかと考えております。

（写真27）  
これは頭を飾つておりました王饗状装飾品です。これをかぶせてみると写真のようになります。死者にかぶせて寝させていたのです。

### （二）民族資料からみた装身具

これは一九世紀の前半ぐらいのモンゴルより少し西の地方の装身具です。重

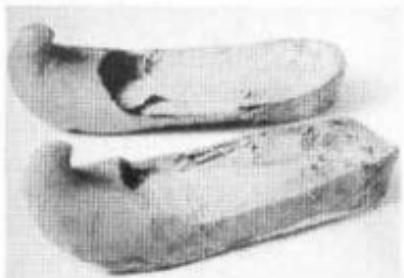


写真24



写真25



写真25



写真26

かざりに金や銀製の金具を取り付けまして、体の側面や後ろ側を飾りたてることをしております。  
 これは後ろから見たところです。藤ノ木古墳の出土品の場合は、もっと玉を密集させて垂れ下げておりますが、この場合は網状に編んで、そこから玉を一連ずつにし、先に金具を付けて垂れ下げています。前のほうに垂れ下げるのではなくて、後ろを覆うところは、藤ノ木古墳の玉簾状装身具を考える上で参考になるものです。

(写真25)

これもモンゴル地方の衣装であります、やはり布製の帽子状のものがあり



写真27



写真28

まして、そこに玉の飾りやその他を取り付け、後ろのほうへも玉を取り付けた布を垂れ下げております。こういうものを見てていきますと、全部玉でなくとも布に玉を付けていても同じということを感じます。ごくこの間まで藤ノ木古墳出土品と類似する装身具をついている人が、中国の辺境部にいたわけです。

(写真28)

これはタイ系民族の衣装です。鏡を胸に付けまして、後ろには長い銀製の飾り金具と玉の付いたものをぶら下げていませ。飾り金具に魚が付いている点で、魚の神話が装身具に表されていると私は思っています。魚と獸のようなものを飾り金具にしまして、そこからまた、他の垂れ飾りを付けています。こういうものを見ていきますと、全体の衣装は、藤ノ木古墳の場合と少し異なっておりますが、意図しようとしたものはお互いに共通していると思います。



写真29

これは中央アジア周辺の装身具です。ターバン状に布を巻いたところに編んだガラス玉を取り付けまして、そしてその裏側から垂れ下がる金具を取り付けています。顔の両側に垂れ下がるという点では、藤ノ木古墳の玉を下げる飾り方と非常に共通しています。

(卷頭)

これは石棺の中を覆つておりました錦の掛け布です。我々は「ヒツク」と呼んでいるものです。石棺の幅と大体合わせた所に、金メッキを施した金具を約一〇〇個位取り付け、そこに房をぶら下げています。この房は金具で固定され、六色に色分けしています。これもまた意味があるだろうと思います。残念ながら石棺から出土たときは各々房が切り離れたりしていて、ごく僅かしか残つておりません。房が一方向に取り付けられていることから、以前は、ぶら下げていたもの

で、棺の中を覆ったと考えられます。石棺を最初に開けました写真に、銅鋸のういた丸いものがいっぱい写っていましたが、それはこの布団状のものにとりつけた金具が水で錆びて緑青色をしていました。今回はこれらの断片から復元したわけです。

(参考写真)  
藤ノ木古墳の小刀

藤ノ木古墳の小刀と非常によく似たものが韓国の武寧王、百濟の王様であります。その人のお墓からでています。また、武寧王の墓からたくさんガラス玉が出土しています。中でも、黄色いガラス玉というのは非常に作りにくいわけですが、五三〇年代の武寧王の墓から出てまいりました。日本では黄色いガラス玉は、朝鮮半島と非常にかかわりのある、和歌山の岩橋千塚や大谷古墳から出土しています。地域によってまとまって出土しているところがあります。藤ノ木古墳の場合は先程の王簾状装飾品の中に、黄色いガラス玉がふんだんに使われています。

(参考写真)

これは伊勢神宮のご神宝のなかの刀のさげ緒のところに付いている「船形」というものです。こちらは立体的ですが、藤ノ木古墳の場合は扁平なものとして表現されています。

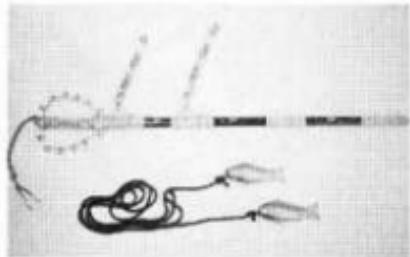


写真31

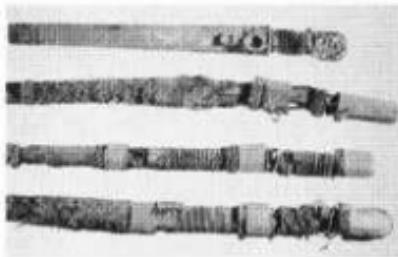


写真30

## 六、藤ノ木古墳と歴史的意義

### (一) 古墳の立地の墳形

時間がだいぶ押し迫ってまいりましたが、私は文様とか取り付いている飾り金具を観察しまして、藤ノ木古墳の神話の世界を何らかの形で知りたいと思いまして、最初の話をさせていただきました。しかし、先程、後ろに座らせていただいてましたら、藤ノ木古墳の主はわかったのかというお話を出ておりました。これは未だわかりませんと言つてお答えはありません。しかし、私は藤ノ木古墳の被葬者を考えるヒントというものが三つ程あると思っています。一つは古墳が何處に作られているかということです。大和と河内の接点に近い場所の大和側にある。先程から言つておりますように、古代の交通路で最も重要な畠田道の要所にあるということです。次に古墳の形というものを重視する必要があるかと思います。藤ノ木古墳が直径四七メートルの円墳であるということに意味があると思います。その次に、藤ノ木古墳の石室と石棺が、どの地方のものに似ているのか、この三つに要約されると思います。まず、古墳が作られている場所は、畠田道の真ん中ぐらい、大和の入口に造られているということです。これは両方の解釈ができます。先程、郡川の車塚古墳の話をしまし

たが、この竜田道の西側の起点は、物部氏が勢力をもっておりました八尾の周辺です。そして、この竜田道をどんどん東の方へ行きますと天理の石上へ着きます。石上神宮は、物部氏が朝廷の武器を管理しておった武器庫が神社になつたということが記録の上でわかつておりますと、大和側のこの道の周辺も物部氏の本拠地であるということであります。だから、どなたかがおっしゃるようにな物部氏説を打ち出されたところで、それはひとつの解釈として可能であるわけです。河内の物部と、大和の物部の本拠地をむすんでいるルート上の古墳は、全部物部氏と見たらいいという考え方も、説としては間違いではないと思います。しかし、古代大和の政治の動きは、日本書紀その他に非常に詳しく記録されております。特に古いところはともかくとしまして、既に飛鳥時代に近い頃の記録は、かなり信憑性があると考えられておりますので、歴史の流れの中にほめこみますと、藤ノ木古墳が何時造られたかということに係わつてくると思ひます。私は藤ノ木古墳が造られた時代は少なくとも六世紀、五〇〇年代の中を四つぐらいに分けますと、真ん中よりも後ろで、役所用語で言えば、第三四半期と呼んでいる三番目の期間ぐらいだらうと考えております。この時代といふのは各豪族連中の榮枯盛衰の激しい時代であります。大和古来の豪族であり

ました葛城氏が力をなくし、平群氏も力をなくして、新興勢力であります大伴氏とか物部氏というものが相並び立って、そして大伴氏が対朝鮮政策で失敗をしますと、物部氏が勢力を持つというのが第二四半期であります。しかし、その第二四半期も後半になつてまいりますと、物部氏から次の蘇我氏の時代へ移り変わる時期になるかと思います。物部氏は八尾とも非常に関係が深いわけですが、五八七年に物部守屋が滅ぼされるという事件があります。この五八七年以前であればまだ守屋の時代でありますから、物部氏が勢力を持っています。しかし、豪族はいっべんに滅ぼされるわけではありません。徐々にいろんなことで力をなくしていく、最終的に没落するのが五八七年であると私は思っています。そうしますと、流れから見ると五七〇年代に入つてまいりますと、物部氏も力を弱めていたのではないか、それと反比例するように蘇我氏が力を出してきたと、私は考えております。

## (二) 大和の大型後期古墳と豪族

その次に、古墳についての決め手というものを考えていくと、古墳の形が円墳であるということに意味があると思つています。図6を見ていただいたらわかりますが、大和の中で有力な勢力を持つておりました、例えば物部氏は

①と②の地区、天理市石上の辺は物部氏の墳墓地帯で一二〇メートルぐらいの大きな古墳を築いておりまして、これが五基程まとまってあります。これらは皆、大きな石室を持った前方後円墳であります。内部に大きな石棺のはいっている東乘鞍古墳もあります。③の辺りは二輪の北の辺であります。大伴氏や三輪氏がこの時代に勢力をもってまいります。これも新興勢力であります。前方後円墳を築いています。④は桜井の少し東の方の山間地から飛鳥にかけての磯城・弊余と呼ばれていた地域です。この辺は、円墳或は方墳で越塚古墳とか赤阪天干山古墳と呼んでいる、大きな横穴式石室で、石棺を持ったものがあります。このへんは中臣氏の勢力圏という意見と、皇室に係わる地域であるといふ意見の二説があります。⑤は飛鳥の入口の周辺であります。南東の方へいきますと石舞台古墳があります。越智丘周辺には一基だけ大きい前方後円墳があります。これは全長が二〇〇メートル程ある見瀬丸山古墳で、⑤の横にある古墳がそうです。これは天皇陵ではないかと言われております。それ以外の古墳は、横穴式石室をもつて前方後円墳というのは余り無いわけであります。この辺は一部は天皇家の陵墓と蘇我氏の墓が入り交じっている地域であると考えられています。そして、そのさらに南の方へ行きますと、水泥北・南

古墳、その他がありますが、これは蘇我氏の一族の墓ではないかと言われておりますし、一説にはこれは巨勢谷<sup>ヒカセヤマ</sup>というところでありますから、巨勢氏との何かわりが考えられています。そして、⑥の葛城の山麓に行きますと、一塚古墳と、半林古墳<sup>ハーリンコウボン</sup>というのが新庄と当麻町にあります。どちらも全長は八〇メートルぐらいの前方後円墳で横穴式石室をもっています。藤ノ木古墳の石室とも、非常によく似たタイプの古墳であります。これが前方後円墳であるということが問題になつてまいります。そして⑦に行きますと、牧野古墳<sup>ムカニコウボン</sup>というのが馬見丘陵の真ん中ぐらにあります。これは大きな円墳であります。藤ノ木古墳と比べると、石室の構造その他に新しい要素があります。そして、その少し北の方へ行きますと藤ノ木古墳があります。藤ノ木古墳は先程米吉<sup>コメヨシ</sup>と申しますように円墳であります。平群谷<sup>ヒラグンヤマ</sup>というところへ行きますと、鳥上塚古墳<sup>トリミツコウボン</sup>というのが前方後円墳で、やはり藤ノ木古墳とよく似ています。しかし、石室の構造・石材の使い方、その他を見ますと藤ノ木古墳より少し新しいといえます。しかし、前方後円墳で平群の谷にありますので、平群氏の墓<sup>ヒラグンジ</sup>という考え方が最もいいと思います。そうしますと、鳥上塚古墳が平群氏、そして平林、二塚古墳というのが葛城系の豪族、そして①、②が物部氏、③が大伴・三輪氏というよう

に考えていくと、大きな古墳で前方後円墳があまりない地区と言いますと、④と⑤という地区に求められるわけです。次に、石棺が非常によく似ていて、或は共通点が多くみられるのは、飛鳥の都塚古墳とか赤坂天王山古墳とか、巨勢谷の新宮山古墳が比較的、藤ノ木古墳の石棺とよく似ています。しかも墳形が前方後円墳でなく、円墳である。従来の豪族である平群氏にしても、葛城氏にしても、物部氏にしても、藤木古墳と同時代の古墳は前方後円墳の形をとっています。藤ノ木古墳は円墳であるという点で、物部氏系の墓というよりも、次の世代に力を伸ばした④か⑤辺りの桜井南部か或は飛鳥の周辺の勢力が北西の方向に、斑鳩の方へ進出してきたのではないかと私は見てています。しかし、それはずばり蘇我氏であったかどうかわかりません。蘇我系の息のかかった氏族がこちらへ進出したのではないかと見てています。残念ながら蘇我氏の墓を物語るような伝承というものは、斑鳩の周辺には無いわけです。しかし、文献、その他を搜しますと、少し時代が下りますが、皇族関係で間人皇女のお墓が竜田清水墓、そしてその隣の竜田苑部墓というのは石前皇女の墓で、平群郡にあるということが書かれています。石前皇女は欽明天皇の皇女ですし、間人皇女は舒明天皇の皇女として生まれまして、この斑鳩の周辺に葬ったということと

間人皇女  
日-ひのひと

①火種御間人皇女。欽明天皇

第二皇女。櫛邊太子の母。

②舒明天皇皇女。孝謙天皇の皇后。

になつております。このように見ていきますと、欽明天皇や舒明天皇は明らかに蘇我系の天皇でありますので、斑鳩周辺に葬られた。特に間人皇女は「一人おいでになられて、その内の一人は、欽明天皇と小姫君の間の子供です。よく黒岩重吾さんが小姫君を藤ノ木古墳の被葬者にあてておられます。その人の皇女の墓がこちらにあると出でます。私は、この人の墓だとは全然思つておりますが、蘇我系の皇族の墓が後に造られていくということは、やはり法隆寺周辺に蘇我氏の勢力が伸びてきたことを暗示していると考えております。

## 七、まとめにかえて

### (一) 藤ノ木古墳の被葬者

それからもう一つは崇峻天皇、最近、崇峻天皇が被葬者として非常にでてまいります。どういう理由なのか分かりませんが、法隆寺の文書の中に、特に鎌倉時代の文書の中に「陵」<sup>みささぎ</sup>というのがありますと、「陵」<sup>みささぎ</sup>「崇峻天皇陵」というようになつてまいります。どういう形で崇峻天皇陵になつていくのかよく分かりませんが、崇峻天皇と書いてあるのは鎌倉時代の記録にまつめにかえて、江戸時代の記録にあるわけです。どうもそこから最近は、藤ノ木古墳が崇峻天皇陵になりつつあるのです。崇峻天皇を『日本書紀』などでみて見

諸陵式にいう竈出清水墓は(2)の説がとられていますが、日本書紀には尊施天皇とともに小山圓陵に葬ったたとあるので、(1)の穴穂部間人皇女の墓を示すのではないかとの意見が強い。従来、穴穂部間人皇女は聖德太子墓に合葬されたことになつてゐる。

ますと、欽明天皇二年のところで、五人の妃を入れたとあります。その内、小姉君との間に四男一女が生まれ、一番末の子が泊瀬皇子（後の崇峻天皇）とあります。欽明天皇二年は日本書記の換算どおりいきますと五三二年となるわけで、この五三二年より後にお生まれになつたと考えられます。一方、「崇峻天皇即位前記」には、泊瀬部天皇は欽明天皇の第十一子とあります。

一方、「紹運錄」という本に「繼体十四年辛丑降誕、大嘗元年二月即位六十九、五年十月崩七十二、為馬子宿祢被殺、葬倉橋岡上陵、大和國下市町倉橋宮」とあります。繼体天皇の十四年というのは、「日本書紀」とおり換算しますと、五二〇年にります。そして、古事記では長谷部若齋（ながやべのわかさわ）という呼び方をしておりまして、桜井の東邊に長谷（ロザ）（初瀬）という地名がありますが、その地域との結びつきが考えられます。崇峻天皇は五年の十一月、「日本書紀」とおり換算しますと五九二年に暗殺されます。「紹運錄」でとりますと、五九二年から五二〇年を引きましたら七一という数字が出てくるわけであります。この計算でいきますと、七二歳ということになります。日本書紀のとおりいきますと、五三二年にお生まれになつたと単純に解釈しましても、六〇歳ということになつてまいります。ところが、欽明天皇と繼体天皇との即位のへんがややこしいと

いう意見があります。現在の天皇の即位と同じで、亡くなつたら次の天皇が即位するという解釈で換算すると良いわけですが、一方、繼体天皇から欽明天皇へ代わるときは、繼体・欽明朝の内乱というものがあつて、実は、欽明天皇は繼体天皇とだぶつて即位していたんだという意見もあります。そのだぶりを何年によるかということで意見がわかっています。その間をだいたい一〇年前後というように林屋辰一郎先生はおっしゃつておりますが、一〇年前後としますと、六〇から引きましても五〇歳ぐらいになるわけです。藤ノ木古墳の被葬者は先程来、装身具その他でも再三申し上げましたが、この古墳では北側の人のが墓の主であります。その人は医学の上では一八から二四、五歳までと明らかにされているわけです。崇峻天皇は、我々が思つて以上に、お年をとつておられたのです。年齢、その他から見ましても、私は藤ノ木古墳の被葬者は崇峻天皇といふのは成り立たないと考えております。藤ノ木古墳の被葬者を誰と決めるることはできませんが、やはり物部氏から蘇我氏へと時代が移り変わる中で、竜田道をおさえるために、この辺に新しく勢力を伸ばした新興の豪族が、この藤ノ木古墳の被葬者であると思われ、そのバックには蘇我氏というものが見え隠れしているということを申し述べておきます。

林屋辰一郎（はやしやたつさぶろう）  
大正3年生。京都大学文学部  
国史専攻卒。立命館人学教授、  
京都大学教養、京都大学人文  
科学研究所長、京都国立博物  
館長。  
「小世文化の風潮」、「古代國  
家の解体」「日本藝術史論」  
その他多数。

それから、物部氏は大和に本拠を持ちながらなぜこの八尾の辺り、守削、淡川にいたのかということになりますが、当時の政治経済活動を見ていくと、八尾の周辺にいたほうが河内の港をおさえるという点で非常に有利であったわけです。新しい文化や情報、経済的価値のある文物は、朝鮮半島などから入って来るわけです。だから、米や地方の特産物を独占する以上に、経済基盤の確立が、政治・武力の上で優位を占める絶対条件であったと考えられます。

物部氏によって失脚させられた大伴氏でさえ住吉津すみよしづを勤こうとはしませんでした。この住吉津は良港であり、貿易による利潤があったからでしょう。

少し後のことになりますが、五八七年に物部氏が没落して、その旧領は聖徳太子に所属することになります。その後、聖徳太子は物部氏の旧領の収益によつて、四天王寺の建立を行つたとあります。しかし、四大王寺の立地を見ていたいたらわかりますが、上町台地の先端近くにあり、難波津のあつた場所に近く、仁徳天皇の難波高津宮などもこの周辺にあつたとされ、古代の重要な地域のためと見られます。

## (二) 聖徳太子と四天王寺

推測に推測を重ねますが、聖徳太子も難波の地の重要性に注目していたので

しょう。四天王寺の建立という手段で、難波津を支配したと考えられないでしょうか。聖徳太子も視野の広い政治家であったと思われます。

東高野街道に沿った八尾市周辺に知識寺や教興寺などの寺院が建立されます。が、物部氏の主家が滅びた後も、依然、勢力を維持した物部系の在地豪族がいたと思われます。これらの豪族に、仏教の布教と言う形で寺院の建立を進め、寺院建立による経済的消耗によって、地方豪族の弱小化と律令体制への組み入れへの道を進めたと考えられます。

後の豊臣氏崩壊への道が、豊臣秀頼による各寺社の再建・寄進が経済的基盤を弱めていったのと似かよっていると言えます。

### (三) 研究は永遠に

本日は大和・河内との関係で藤ノ木古墳の意義を検討しましたが、各地から出土している馬口、鏡などの出土品との類似、また大型後期古墳との共通性は、藤ノ木古墳を汎日本の視野で検討する必要性を物語っています、藤ノ木古墳の研究は永遠に続きます。

藤ノ木古墳を語りつくすことはできませんでしたが、本日はこれで終わらせさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

## 引用文献

23頁 図4 岸俊男「古道の歴史」「古代の日本5」角川書店 昭和45年に加筆

25頁 図5 泉森岐・古間哲「東高野街道と考古学」「環境文化五十一」昭和56年

28頁 図7 泉森岐「考古学的にみた人和から伊勢湾岸への交通路」「環境文化五十五年」昭和57年

40頁 図8 「中国の神話伝説集」

## あとがき

全国的に注目を集めた藤ノ木古墳が発見されて、二年余りになります。発見当時、この古墳の調査に携わっておられた泉森先生をお招きしての講演会は、「先生」自身が「私の話は好み焼きです。」と、おしゃるよう様々な角度から藤ノ木古墳を語っていただき、たいへん興味深い内容でした。新鮮な情報をお届けしようと思い、記録集第二集はこの講演だけを掲載しました。

本書の作成にあたり、泉森先生には資料の提供等、たいへんな熱意をもってご協力を賜わりました。ここに記して、厚くお礼申し上げます。

平成三年三月

八尾市文化財調査研究会報告30  
藤ノ木古墳と古代の河内  
**文化財講座記録集 3**

発行 平成3年3月

編集 一般法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水町1丁目2番1号  
☎0729-91-1700

印刷 明新印刷株式会社

